

シブソンパンナー、茶馬古道、援蔣ルートの戦跡を訪ねて

秋畑 進
雲南懇話会

はじめに

2006年10月のフィールドワークでは、西部大開発の号令の下に開発中の地域や、1990年まで外国人に開放されなかった地域を目の当たりにすることが出来、林学専攻の同行者や中国人ガイドから学び、驚きと疑問を感じながらの旅となった。短期間に約1700キロの距離を車で移動したので、現地の人と接点を持つことが少なく、調査報告というより見聞録である。連なる盆地世界は奥深く、高地に住むチベット・ビルマ語系諸民族の生態を垣間見ることが出来なかった。少数民族、茶馬古道、西南シルクロード、援蔣ルート、騰冲、拉孟、龍陵などのキーワードを切り口にして照葉樹林帯で観察したものを写真とともに紹介する。

シブソンパンナー（西双版纳）

シブソンパンナーとは、タイ語でシブソン（12）のパン（1000）ナー（田、貢租徴収のための行政単位）で、12の広い耕地のあるところという意味になる。16世紀後半からツェンフン（景洪）を中心とするムン（傣族の自律的政治単位）連合を指すようになった¹⁾。

景洪はツェンフン盆地東部メコン川沿いにある、人口は37万人、標高500m台にある。

私たちは、まず景洪の東80キロの勐倫にある熱帯植物園（写真1）に向かった。途中、メコン川沿岸にある勐罕の農貿市場（自由市場）に寄る。キャベツ、人參、白菜、みかん、リンゴ、柿、柘榴など日本と同じ野菜や果物が並んでいた。ドジョウ、鯉、鮰も売っている²⁾。

北京オリンピック開催に合わせ、北京とバンコクを結ぶ高速道路が建設中だった。1950年代から始まったゴム園も元々の景観を変えていた。

熱帯植物園はメコン川の支流が大きく蛇行してできたヒョウタン型の半島にある。中国科学院研究所だったところが1999年に一般公開されたも

ので、正式な名称は中国科学院西双版纳熱帯植物園という。1958年に創立され、広さ900ヘクタールあり、現在70人の科学者、60人の庭師、40人のスタッフが働いている。各国の植物を移植、1万種以上の植物があり、秋篠宮ご夫妻は1998年8月7日に黒檀の木を植樹されていた。寿命8000年の竜血樹は赤い樹液が出る。雲南ニクズク（香樟）の下にカルダモン（砂仁）、ゴムと茶の樹の下にカルダモンといった立体的に空間を利用した栽培をしている。

景洪に帰る途中に寄った傣族園（写真2）の寺は800年の歴史があり、小乗仏教と土着信仰が併存している。文化大革命では牛小屋として使われていたという。傣族の伝統的な家にも秋篠宮ご夫妻が訪問されていた³⁾。

傣族の寝室には魂が宿るといって見学はできなかった。蚊帳の色が年寄り黒、新婚は赤、子どもは白と決まっていた。私は長年タイの旅が続けているが、傣族の政治単位は盆地を基盤としており、北タイ地域が14～16世紀にランナータイと呼ばれていた頃の傣族とシブソンパンナーの傣族との歴史的比較が興味深い。

因みに傣族の文化の特徴は三つあげられる⁴⁾。

①古代越人の稲作文化（高床式住居、入れ墨、おはぐろ等）を継承している。

②蜀の宰相諸葛孔明は、竹を使った家の建築、茶の製法、女性がスカートをはく習慣を教えたと伝えられるように中国文化を吸収している。

③インドのパーリー文字の流れから生まれた文字と仏暦を使っている。

南京医学院副学長を務めた姚荷生氏はシブソンパンナー見聞録で傣族の基本精神を三つにまとめている。

①平和を熱愛する。②迷信がきわめて深い。③樂觀的で足を知る⁵⁾。

景洪の町に戻り、民族風情園に入る。ここは1987年に設立された。1950年に国民党と共産党が覇権を争い100名戦死したことを記念して建立された開放記念塔「革命烈士永垂不朽」が、風情園入口から見える。基諾族、哈尼族、布朗族の家では、民族衣装を着た女性ガイドから家屋や調度品について説明を受けた。

照葉樹林帯に住む民族は納豆やナレズシといった発酵食品をつくり、漆器や竹細工、歌垣の習慣、類似の伝説を持つ等、日本と共通する文化的特色がある。一方、そこに住む民族は海拔高度によって多様に棲み分けをしている⁹⁾。傣族は平野・盆地で稲作を、基諾族は太陽を崇拝し採集、狩猟を主体とした生活を送り、哈尼族は棚田の開拓技術に秀で茶を栽培し、布朗族は焼畑を営んでいる。

シブソンパンナー大橋を渡り、東に8キロ行くと原始森林公園に着く。ここでは動物ショーや孔雀が舞い降りるシーンを見た。孔雀は傣族の吉祥と幸福の象徴であった⁷⁾。竹を巧妙に編んで出来た遊歩道を歩き、高さ30m以上ある板根をもつ四数木(*Tetramelea nudiflora*)を仰ぎ見ながら周回する。紅椿は国家第二級保存樹という。

景洪のみならずインド・チベットにも支店を持つという普洱茶屋「恒盛祥」に行くと、茶馬古道についての案内板があり、一室で実演があった。お湯を入れて3回捨ててから飲む。150年物は故宮博物院に保管されているという。6年物と2年物を飲んでみたが、6年物の方が味と香りを強く感じた。小さい湯飲みで10回ほど飲めるといい、3〜4回目が飲み頃という。急須に入れた俣でも3日間は飲めるといふ。

茶馬古道

景洪から高速道路に入り、戦前まで匪賊と猛獣が徘徊していた密林地帯だったところを通る。霧が深い。「野生象通過注意」という標識が立ち、野生象が橋の下を通れるようにしていた。

大渡風を通ると中国最大級という茶畑が現われ、腰の高さに刈り取った茶畑で籠を背負った人が茶摘みをしていた。偶然から生まれた普洱茶の伝説によると、18世紀、都に向けて茶を馬に乗せて3ヶ月運ぶ内に雨にぬらしてしまい、止むを得ず倉庫に捨てていた。その間に発酵され、茶湯の色は濃い赤で明るくなっていた。飲んでみると

苦さの中にも甘さがある。これを飲んだ乾隆帝はお気に召され「普洱茶」という名を賜った⁹⁾。普洱は交易地として発展、品質の良いものが皇帝に献上されてブランド名になり、今は昆明が取引センターになっている。普洱茶は苦さのために消化液の分泌を促進する⁹⁾ほか、チベットの遊牧民にとって茶はビタミンを補うために必要なもので、普洱茶を使ったバター茶は糖尿病に効くという。そこで馬との交換貿易が生まれ、古来、雲南とチベットを結ぶ茶馬古道ができた。その起源は定かではない。

景洪から2時間、思茅市(2007年4月から普洱市に改名)の洗馬河公園(写真3)に行く。1958年3月、人民解放軍がダムを建設し飲用と農業用に使用している。標高1300mにあり、ダム湖面には諸葛孔明の軍が馬を洗ったという故事に基づく作品があり、湖畔には諸葛孔明の像が立っていた。諸葛孔明は傣族のみならず雲南地区の少数民族に農業や養蚕を奨励し、生産性の向上、経済の発展を支援したため、彼らから大いに慕われ、孔明を褒めたたえる多くの逸話や伝説が今に残っている¹⁰⁾。

思茅から1時間、普洱のレストラン「雨軽風景園」で彝族の衣装を着た女性に接待される。長いスカートは何段かに切り替えて段ごとに違う色の布地を用いて仕立てられている¹¹⁾。彝族は人口約776万(2000年時点、「中国民族年鑑2004」による)、黄河上流地域が発祥地で、一部が南詔王国を建国する。土間形式の平屋根木造家屋に住み、主食はツアンパ(炒った麦粉を水で練ったもの)でチベット族の食習慣に近い¹²⁾。彝族伝説によると3000人の男と2000人の女が経典を持って日本に渡っているという¹³⁾。

宿泊地、景東は町の近くに金鉱山があるせいか豊かな雰囲気だった。新抚川に沿って北上する。茶馬古道は幾つもの盆地を巡り、昔は馬が通る道で勾配8度あったが、今の自動車道路は勾配5度になっているという。20年前からオーストラリアのユーカリを道路沿いに植樹していた。ユーカリは瘠地でも成長が早く、紙の原料となり、葉を蒸留して油にしたり咳止めの薬になる¹⁴⁾。

高度2000mまで上がってから下りて下関に出る。ここは人口30万。ビルマ国との関所だったところで犬肉料理店があった。犬食文化が残って

いるのは、中国や朝鮮半島のような農耕社会で、中国では雲南省のほか広東省、湖南省、貴州省などに犬食の風習があるという¹⁵⁾。私が東北タイを旅したときも仄聞している。

大理に入り、白族レストラン「阿達音」で白とピンクの衣装を着た女性に接待されながら、赤豆、じゃがいもと茄子の炒め物、百合の実料理を食べる。白族の未婚の娘は、赤い紐を編み込んだ長い三つ編みを、頭頂にまとめて、その上に色もののターバンをかぶり、耳のそばに白い房を垂らす¹⁶⁾。白族は人口約186万（2000年時点）、大理白族自治州に80%が住む。1253年、モンゴル軍に負けるまで南詔国を支配していた。ガイドが解説する。「彼らは少林寺拳法が強い。唐代には漢族と戦っており、3万人の捕虜が出た。藍染めが得意で既婚女性は頭に藍染めの布を巻く。翡翠を魔除けとして使っている。白色を好み建築技術が優れている」。(写真4、左の門参照)

大理から保山への道は西南シルクロードだったところだが、今回は高速道路を走る。杉陽インターチェンジで降り、丘陵地帯の石畳の道を走り、今も残るシルクロード博南古道（写真5）を歩く。牛や豚も通る生活道だった。近くの西山寺へ上っていくと白壁に大きく「南無妙法蓮華經」と書かれていた。

再び高速道路に戻り保山に入る。人口は240万、標高1676mである。

日本軍は保山を1941年から1942年5月27日までに128機が空爆している。その中で1942年5月4日の爆撃は、学生記念日に人々が集まったところを27機が、翌日は54機が無差別に爆撃、2日間で1万人以上が殺され、生物兵器により発生したペストや脳炎による死を含め全体で死者は5～6万人に達したという¹⁷⁾。公園に立つ滇西抗日戦争記念碑には日本軍による侵略の歴史が綿々と彫られていた。

反日感情のとても強い地域と聞いていたが、幸い無事だった。昼、大きな本屋に入っても電気をつけず、夜、レストランではロウソクを灯していた。電力事情が厳しいのだろうか。

保山から蒲缥鎮に行く。蒲は川辺、缥は山を意味する。盆地の中、新石器時代の遺跡が残る歴史的な町だった。7～8000年前、狩猟民族のウラ人とヒョウ人が住んでおり、ウラ人は今日の布朗族

を形成している¹⁸⁾。町の中心部に豹を担いで槍を持つ蒲缥人銅像（写真6）が立っていた。茶馬古道にかかる橋から梁金山（恵通橋資金提供者）の生誕地へ行く。彼は金鉞を掘り当てて財をなした190cmの偉丈夫で17人の子どもがいた。5番目の夫人の娘さんが墓まで案内してくれた。

援蔣ルートの戦跡

蒲缥鎮から2時間走って渡った怒江（サルウィン川）大橋は新しく、軍隊が警備していて写真撮影禁止だった。標高2000mまで上がってから盆地状の騰冲（写真7）に下りていく。騰冲（越）は人口50万人、標高は1630m。ビルマ・インド・チベットへ向かう交通の要衝である。翡翠の宝飾加工地として有名。

4キロ西方の和順郷（写真8）は人口1万6千、華僑の故郷といわれている。人口の94%をしめる漢族は、明の初期、朝廷の辺境政策に応じて四川、湖南、南京などから駐屯して来た人々の子孫という。土地不足のため、当時から東南アジアに出稼ぎに赴き、翡翠加工と穀物の売買で財を築いた。外国から帰ってきた華僑は3000人を越えている。華僑の姓は8つに分布され、定期的に始祖の墓か祠堂で宗教単位の祖先祭祀を行い、宗族の親睦を図っている¹⁹⁾。

入口の門の中央上に「文治光昌（文化で治める）」と書かれていた。日本軍は、日本人留學生がいたせいもあるが、ここを戦場としなかった。1928年、ビルマ在住の華僑達の寄付で図書館が建てられている。蔵書が7万冊あり、カードで検索できる。

戦争博物館にはPeaceと書いた爆弾の弾倉を土台にして、鳩二羽が停まった十字架像（十字架は希望、鳩は平和を象徴）が設置されていた。その他、当時の外套、革靴、鉄兜、五万分の一軍事地図、防毒マスクなどを展示していた。イギリス軍は雲南遠征軍を前線に出して戦った。雲南西部地区の中国側戦死者は28427人、ペスト・飢餓死は92354人という。インド・レッドからのハンプ（ラクダの背こぶ）空輸ルートについても解説していた。これは日本軍によって切断された援蔣ルートに代わり、インド・アッサム地方のレッドから昆明を結ぶ空中補給で、山々をラクダの背にたてえてハンプ（ラクダの背こぶ）空輸と称された。高山の気流が複雑な上、日本軍機の攻撃があり、3年

間にアメリカ陸軍運輸隊468機、中国軍46機を損失している²⁰⁾。

文化大革命では華僑たちは「反革命分子」の札をぶら下げられたり、スパイ容疑にかけられたりしたというが、こうした展示場には全く残されていなかった。

博物館を出て華僑の街を一回りする。家の門には文門神と武將門神を書いたポスターが貼ってあり、入口を守っている。現地ガイドが一軒の李家を案内してくれた。中庭は白壁で光が反射して明るい。応接室に道教を祀っており、2階の庇にはトウモロコシを吊るしていた。客人用の宿泊施設が幾つかあった。

騰冲に戻り、昼食を来鳳山の麓でとる。来鳳山は2億3千年前に火山爆発で出来ている。山は松が茂っており、塹壕や大砲で削られたところが至るところに残っていた。1827年、頂上に白笔塔が建てられ、2000年6月再建されている。塔は13階208段あり、上ってみると、町が一望できた。

今は無き騰越城は盆地のほぼ中央にあり、明の光宗帝時代（1630年）に築いたものと言われている。城壁は周囲4キロ、ほぼ正方形で高さ5m、周壁の幅2m、外側は石、内側は土で積み重ねてあった²¹⁾。騰越の日本軍守備隊として2千数百名の将兵がいたが、落城の1944年9月14日には生存者60人、その後、死守という命令のもとに殆どの将兵が死んでいったという²²⁾。戦時を偲ぶ。

山を下り国殇墓園の門に入る。直ぐ右手に日本軍将兵の墓「倭塚」があった。園内にある抗戦記念館では孫文の肖像や国民党旗を見る。外に出ると左手に19名の米軍兵士、中央に雲南遠征軍の戦死将校20名の墓があった。丘の上に向かって上等兵から順々に位が上がった兵士の墓があり、頂上に雲南遠征軍将兵を民族英雄として称える塔が立っていた。

翌日、怒江にかかる惠通橋への道を走る。サトウキビ畑が続いた後、砂糖工場があった。バナナやコーヒー栽培の畑もあり、のどかな風景の中をゆっくりと走っていくと怒江が眼下に見えてきた。川を挟んで鉢巻山（写真9、中国・雲南遠征軍陣地）と拉孟（日本・ビルマ方面軍陣地）が対峙し、援蒋ルートの要である惠通橋（写真10）がかかっていた。

橋は最初1935年建設、1938年修復後、1942年

5月、日本軍を通さないよう雲南遠征軍が破壊、1944年9月に修復して松山戦（日本軍史では拉孟戦という）に向かった経緯がある。

日中戦争発生後、日本軍によって海上封鎖された国民党政府はビルマ公路（援蒋ルート）を建設、1941年11月には英国船がラングーンに入港し、物資を昆明へ運んでいた。日本軍のビルマ進攻作戦の目的の一つは、このルートを遮断することであった²³⁾。

拉孟に行くと、住民が家の奥から日本軍の刀、銃剣、不発弾を持ってきて見せてくれた。

松山（拉孟）主戦場跡には1986年5月24日建立の碑（写真11）があり、「1944年8月20日から雲南遠征軍第8軍が総攻撃、9月7日、日本軍最後の拠点を落としたが惨烈を極めた」と書かれていた。碑の周囲を掃除し、冥福を祈る。

1990年以降、日本人に開放されてから、拉孟戦の主力部隊56師団（龍部隊）の主な出身地福岡県の人がよく訪ねて来るという。両軍が死闘を続けている間でも両軍の最前線に位置した貯水池は共用していたという。拉孟守備隊長金光恵次郎少佐が指揮をとった音部山の下には弾痕がある大木（写真12、14）が立ち、松林の塹壕（写真13）や爆弾痕が残っていた。49倍の兵力を持つ相手と120日間戦い続けた後、2881名が玉砕する²⁴⁾。辻政信参謀の指示で作られた最前線の慰安所²⁵⁾は、援蒋ルートから坂をやや下りたところにあった。慰安所跡にある説明には「日本軍が占拠した間、ここに軍妓院（慰安所）を設立。日本軍が敗れ滅んだ時、軍妓の多くが殺害され、少数が我が軍の俘虜となった」と書いてある²⁶⁾。

援蒋ルートを走って龍陵賓館に泊まる。翌朝、賓館の屋上から戦地だった周囲の山々を眺める。日本のどこにでも見られる盆地風景だった。

日本軍は1942年5月に龍陵を占領。1944年5月、雲南遠征軍の反抗が始まり（第一次会戦）、周囲の高地陣地が中国側に奪回される。辻政信が立案した断作戦²⁷⁾により、龍陵守備隊の救援に勇兵団（第二師団）が向かい、同年9月、第二次会戦が始まる。古山高麗雄は師団衛兵隊の一等兵として龍陵周辺の山中で数ヶ月過ごしており、戦後、生き残りの兵隊を取材して著した「龍陵会戦」でこう書いている。

「蒋総統は、日本軍を見習え、と言ったという。

日本軍の善戦は、日本の公刊戦史で強調されているばかりでなく、アメリカの公刊戦史にも書かれている。しかし、寡兵よく大軍と戦い、粘って、遅らせはしたが、結局は潰滅するしかなかった日本軍の強さを自慢してもむなし。」²⁸⁾

町の中心にある龍陵抗日戦争紀念館は龍陵会戦勝利 60 周年を記念した建物で、梁金山、雲南遠征軍、義勇軍、日本軍の様子、従軍慰安婦の写真などを展示していた。松山（拉孟）から龍陵にかけての戦死者は雲南遠征軍 28384 名、日本軍 13028 人と書いてある。現地女性ガイド趙さんは、数年前に 82 歳の朝鮮人慰安婦に会ったという。

館外に出ると、三叉路の手前に日本軍のトーチカ（咽喉要塞、写真 15）が残っていた。広場には会戦の経緯を書いた揭示版が立ち、道路に近い所にある岩には赤いペンキで「国恥勿忘」と書かれていた。

車に乗って国境に向かう。畹町鎮は標高 830m、税関や免税店があり、橋を渡ればミャンマーのチュゴッになる。ここは滇緬公路がパーモを経由してインドに至る道とマンダレーを経由してアンダマン海に出る道との分岐点だった。

更に西へ 1 時間、瑞麗に着く。人口 12 万、傣族が多く風土も景洪に似ていて暖かい。自由市場を見て帰る。三台山で停まり、滇西抗日戦争紀念碑を見る。西南シルクロードだった石畳道路の脇に立ち、碑の裏には「1944 年 8 月、日本軍が芒市地帯での戦に破れ、三台山まで敗走、更に一戦交えていた」と書いてあった。

おわりに

こうして戦跡を訪ねてみると、日本軍が捨て身の戦術で敗北を遅らせることが出来たとしても、作戦を立案し実行した参謀や司令官の責任は重い。国策を誤った指導者の責任は言うまでもない。

中国側の記録は政治・軍事の側面が殆どで戦死、病死者の数が一桁の数字までどのようにして調査したのか不明であり、当時の社会面や人間の姿が見えなかった。しかし改革開放、観光開発が進み、外国人にも現地に赴く機会が与えられ、今回、直接見聞できたことに感謝したい。

私は 2007 年 8 月、雨季のネパールに行き、ゴークョピークまで登ってきた。そこではインド洋上で熱せられた大気がヒマラヤ南麓にぶつかり、幾

層もの雲が発生していた。これらがアジアモンスーン（季節風）となり、夏は南東あるいは南西の湿った風となって日本の梅雨となる一因であった²⁹⁾。大地では照葉樹林帯を形成し、既に触れたように様々な文化を生み出していることは、1982 年に実施された中国西南部少数民族文化學術調査団によって報告されている³⁰⁾。それから四半世紀、機会があれば尹紹亭雲南大学教授が取り組んでおられる雲南文化生態村を中心にフィールドワークしてみたいと思っている³¹⁾。

※本稿は 2007 年 4 月に開催された第 5 回雲南懇話会において発表した「シブソンパンナー、茶馬古道、援蒋ルートの戦跡を訪ねて」を大幅に加筆、修正し、まとめたものである。作成にあたり、同行した亀田義憲氏には中国語の読み方などを、本フィールドワークを企画、実行された AACK 前田栄三氏には細部にわたり教示していただいた。記して感謝したい。

参考文献

- 1) 「盆地世界の国家論」加藤久美子・京都大学出版会 2000 年 P19
- 2) 自由市場については「雲南フィールドノート」吉野正敏編・古今書院：1993 年の P62～72 及び「中国西南の少数民族」古島琴子・サイマル出版会 1987 年の P16～26 参照。
- 3) この折に殿下は鶏の家禽化について調査され、その成果を「鶏と人」（小学館 2000 年）として著されている。妃殿下は「季刊民族学」（千里文化財団 1999 年）90 号で「孔雀は舞い、竹は奏でる—中国、雲南省南部シブソンパンナーの音楽と舞踊」を著されている。
- 4) 「中国西南の少数民族」古島琴子・サイマル出版会 1987 年 P75～82
- 5) 「雲南のタイ族—シブソンパンナー民族誌」姚荷生・刀水書房 2004 年 P96～97
- 6) 「図録・メコンの世界」秋道智彌編・弘文堂 2007 年「多様な民族世界と照葉樹林文化」佐々木高明 P8～9
- 7) 「季刊・民族学」国立民族学博物館監修・千里文化財団 52 号 1990 年 4 月「タイ族の微笑」鎌澤久也 P65
- 8) 「人民中国（茶馬古道の旅④：馮進）」人民中国雑誌社 2007 年 6 月号 P48

- 9) 「東ユーラシアの生態環境史」上田信・山川出版社 2006 年 P11
- 10) 「概説・中国の少数民族」馬寅主編、君島久子監訳・三省堂 1987 年 P335
- 11) 「中国諸民族服飾図鑑」王輔世主編・柏書房 1991 年 P148
- 12) 「中国少数民族事典」田畑久夫ほか・東京堂出版 2001 年 P142
- 13) 「中国少数民族・農と食の知恵」大石惇、森誠編著・明石書店 2002 年 P167
- 14) 「東南アジア研究」35 巻 3 号京都大学東南アジア研究センター:1997 年 12 月 [雲南の森林史Ⅱ] 阿部健一 P445 ～ 464
- 15) Wikipedia の「犬食文化」参照
- 16) 「中国諸民族服飾図鑑」王輔世主編・柏書房 1991 年 P156
- 17) 「アイデンティティと戦争」山田正行・グリーンピース出版会 2002 年 P76 ～ 77
- 18) 「概説・中国の少数民族」馬寅主編、君島久子監訳・三省堂 1987 年 P40
- 19) 「中国 21」愛知大学現代中国学会編・風媒社 25 巻 2006 年 9 月、[祖先の表象—中国雲南省騰衝県華僑の故郷の和順郷] 韓敏 P83 ～ 114
- 20) 「雲南と近代中国」石島紀之・青木書店 2004 年 P220 ～ 221
- 21) 「菊と龍」相良俊輔・光人社 2004 年 P262
- 22) 「断作戦」古山高麗雄・岩波文庫 2003 年 P269
- 23) 「雲南正面の作戦」陸戦史研究普及会編・原書房 1970 年 P1 ～ 2、8
- 24) 「全滅の思想」榎本捨三・光人社 1978 年 P35、52
- 25) 「菊と龍」相良俊輔・光人社 2004 年 P186
- 26) 従軍慰安婦は 1992 年以来、政治問題になり、1995 年アジア女性基金が発足、今年 3 月解散している。「慰安婦問題という問い」大沼保昭、岸俊光編著・勁草書房 2007 年は、各分野の代表的論者の講義と議論を収録したもので争点がよくわかる。
- 27) 「龍陵会戦」古山高麗雄・岩波文庫 2003 年 P222 ～ 224
- 28) 「龍陵会戦」古山高麗雄・岩波文庫 2003 年 P360
- 29) 「山の世界」梅棹忠夫、山本紀夫編・岩波書店 2004 年 [チベット・ヒマラヤが決める地球の気候] 安成哲三 P108 ～ 109
- 30) 「雲南の照葉樹のもとで」佐々木高明編著・日本放送出版協会 1984 年
- 31) 「民族文化生態村—雲南試店報告」尹紹亭編・雲南民族出版社 2002 年
- 32) 「季刊・民族学 119 (茶馬古道のいまをたずねて: 鎌澤久也)」国立民族学博物館 2007 年新春号
- 33) 「謎の西南シルクロード」劉廷良・原書房 1991
- 34) 「B29 戦略爆撃隊を壊滅せよ」(所収: あゝ、騰越玉砕記・吉野孝公) 光人社 1992 年
- 35) 「我が雲南、ビルマ戦」薬師丸章・海鳥社 1989 年
- 36) 太平洋戦争写真史⑦「フーコン・雲南の戦い」森山康平編・月刊沖繩社 1984 年
- 37) 「戦史叢書・イラワジ会戦」防衛庁防衛研修所戦史部・朝雲新聞社 1969 年
- 38) 「戦場の慰安婦」西野瑠美子・明石書店 2003 年

雲南懇話会第 3 回フィールドワーク（参考）

1. 期間: 2006 年 10 月 23 日～11 月 7 日
2. 参加者 6 名 (敬称略)
(L) 亀田義憲、(SL) 渡辺裕之、秋畑 進、泉谷洋光、本郷一雄、(コーディネーター) 前田栄三。
3. 日程の概要
 - 10 月 23 日 (月) 成田 or 中部空港～チェンマイ
 - 10 月 24 日 (火) 雲南省・シーサンパンナ・タイ族自治州の州都「景洪」(Jing Hong) へ移動。
 - 10 月 25 日 (水) 「景洪」滞在。植物園、泰族園…他、訪問。民族舞踊観劇。
 - 10 月 26 日 (木) 「景洪」発～思茅～普洱県、古城～鎮元～「景東」宿泊
 - 10 月 27 日 (金) 「景東」発～大理～杉陽古関遺跡～「保山」宿泊
 - 10 月 28 日 (土) 「保山」滞在。臥仏寺、太保山公園訪問。
 - 10 月 29 日 (日) 「保山」発～「騰衝(騰沖)」宿泊。騰衝は、インド・ミャンマー・チベットに抜ける重要地点。軍事的要衝。
 - 10 月 30 日 (月) 「騰衝」滞在。国傷墓園、来鳳公園、熱海、華僑の故郷「和順郷」訪問。
 - 10 月 31 日 (火) 「騰衝」発～「龍陵」宿泊。恵通橋、松山戦跡など訪問。
 - 11 月 1 日 (水) 「龍陵」発～「茫市(路西)」宿泊。

南西シルクロードの瑞麗訪問。

11月2日(木)「茫市(路西)」～空路～「昆明」

11月3日(金)「昆明」滞在。中国科学院、
昆明植物研究所、西山森林公園訪問。

11月4日(土)「昆明」発～空路～「景洪」泊。

民族風情園訪問。

11月5日(日)原始森林公園・訪問。景洪～
空路～チェンマイへ移動

11月6日(月)チェンマイ滞在(解散)。

11月7日(火)バンコク経由帰国。



図1 景洪－思茅－大理－保山－瑞麗

出典：雲南省旅遊交通図

シブソンパンナー、茶馬古道、援蒋ルートの戦跡を訪ねて（秋畑 進）



写真1 熱帯植物園



写真2 傣族園



写真3 洗馬河公園



写真4 白族レストラン「阿達音」



写真5 博南古道



写真6 蒲縹人銅像



写真7 現在の騰冲の街



写真8 和順郷入口の門



写真9 鉢巻山（中央正面）と怒江



写真10 怒江にかかる恵通橋（右端が秋畑）



写真11 松山（拉孟）主戦場跡に建つ碑



写真12 弾痕の残る大木



写真 13 そこかしこに残る塹壕



写真 15 街の中心に残るトーチカ（龍陵）



写真 14 弾雨で基部 1/3 を無くした古木



1944.8.2 拉孟・関山陣地
壕内で鑑賞になった日本兵



1944.7.17 拉孟守備隊を猛攻の
傍ら雲南遠征軍は、砲撃の能力も
なくなった日本軍を尻目に、白昼
悠々と拉孟眼下の悠江・惠通橋を
掃修した。橋頭の残っている方が
拉孟（日本軍）側。対岸に見える
のが鉢巻山（中国軍）



1944.9.14 陥落した鎮越城の
日本型将兵の死体（15日撮影）

写真 16. 戦時の記録

出典：『異域の鬼』品野 美、谷沢書店

写真 16 戦時の記録

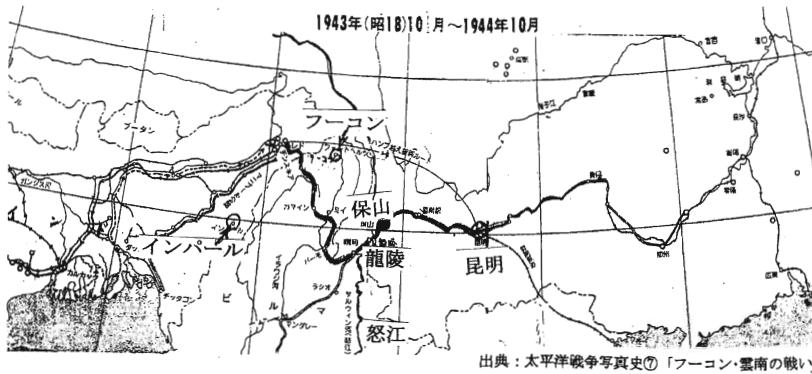


図2 インドービルマー中国にまたがる援蒋ルート

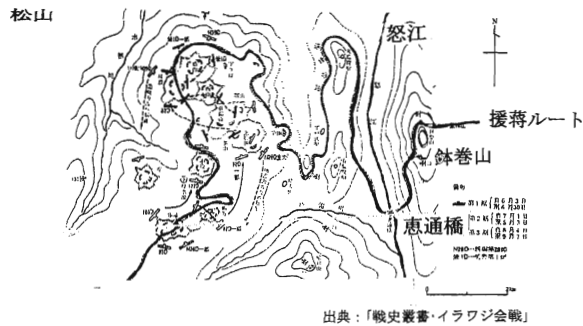


図3 松山／拉孟守備隊戦闘概見図

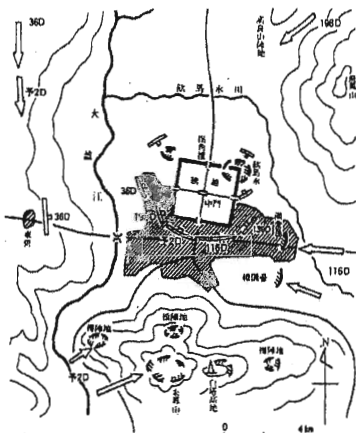


図4 騰冲



図5 龍陵

Summary

Visiting Xishuangbanna, The Ancient Tea and Horse Caravan Road, The Burma Road*

Susumu Akihata

Yunnan Forum

Our fieldwork trip was to see those areas where ,now developing rapidly but were closed to foreigners until 1990. I learned much about forest from colleague members and about local affairs from experienced tour guide.

Although we could not survey traditional life style of ethnic groups well due to limited time and vast distance of 1700km. This turned out to be a kind of essay rather than an academic report of what we have observed. This article aims to report present condition of Xishuangbanna, The Ancient Tea and Horse Caravan Road, The Burma Road.

I would like to introduce pictorial scene in the laurel forest zone by photos.

* The Burma Road means supply route to the Nationalist forces of Chiang Kai-shek by the Allied forces.

Key words: ethnic minority, ancient tea and horse caravan road ,south west silkroad, burma road,
tengchong, lameng, long ling